

温故知新の未来医学

山野井昇 一般財団法人未来医学財団理事長

未病とは、“病未だ現れず”の意味がある。二千年以上前の中国の書物『黄帝内経』で初めて「未病」という言葉が使用された。ここには「聖人は既病を治すのではなく、未病を治す」と記されている。『黄帝内経』では、未病とは病気（病原体）は体内にあるのに、症状が体表面に出ていない、しかし治療しなければ早晩発症が必須なる状態を指している。

東洋医学では、皮膚および五臓六腑はつながっているという考えが根本にある。病気になる前の段階で病気の兆しを見逃さず、軽いうちに異常を見つけて病気を予防するという考え方だ。この原理の基幹をなす『黄帝内経』には、とくに陰陽五行説の記述がなされている。また中国の古い医学書には、『神農本草経』、『傷寒雑病論』がある。

当然、この時代には、現在のようなMRIの高度画像診断や、顕微鏡で細胞や細菌を見るなどの細かい検査や分析はできなかった。その代わり、人が生きていることを「全体的に」捉え、生命の営みを緻密に診ていた。古典の多くには、人と自然、宇宙との繋がりの重要性が説かれている。その中で「陰陽は宇宙の普遍的な法則であり、一切の事物の大綱であり、万物の変化の始源であり、生長、壊滅の基礎である。大いなる道理は陰陽の中に存在している。疾病を治療するには必ず病の変化の根本を追求すべきであり、そしてその道理は〈陰陽〉の二字から離れないのである。」とある。この文句を生体物理医学の現代的意義から考察すると、陽子や電子、素粒子、水素、酸素など万物の本質を究める原子理論と類似するものがある。

漢方や鍼灸などは一見、古代から伝わる伝承医学と見えるかもしれない。しかし、古代から伝わる未来医学という解釈もできる。“温故知新”の諺にあるように、未来医学は真相究明の着眼を、古い伝統ある理論のなかから見出すことは一つの着眼になる。そもそも温故知新は、『論語（為政篇）』の出展によるもので、孔子が師となる条件として、先人の思想や学問を研究するように述べた言葉である。温故知新とは、「子曰く、故きを温ねて、新しきを知れば、以って師と為るべし」と訓読され、「温故」は「故きを温ねて（ふるきをたずねて）」と読まれるのが一般的だが、「故きを温めて（あたためて）」と読むべきである。

現代医学は再生医療の骨格をなすiPS細胞研究をはじめ遺伝子診断など、西洋医学が優位に進みつつある。しかし先進医学にとって未解決なテーマも数多い。未来医学はここそ温故知新の真髄を究め、新しい生命現象のメカニズムを発見し、難しい病気の要因分析を目指すことが重要になる。時代は、西洋の科学的手段を再評価し、そこに東洋の英知を加えた未来医学のイノベーションが開始されなければならない。